多義的な名称を冠した学部を退学する学生の特徴
——大妻女子大学社会情報学部を事例として——
その1
入学から退学までの期間，退学の理由，入学試験を受けた理由

若林　佳史*

要　　約

「情報」や「環境」といった多様な意味を持つ言葉を含む名称の学部の学生がいかなる問題を抱えやすいのかを把握するために，大妻女子大学社会情報学部における開設から10年間の退学者の諸相が調べられた。

観察された主な結果は以下のとおりである。

(1) 1992年度から1998年度に入学した者の4.4%がその後退学していた。彼らのうち，入学1年未満に退学する者，1年以上2年未満在籍して退学する者，2年以上3年未満在籍して退学する者，3年以上在籍して退学する者の割合は，それぞれ，概ね45%，30%，15%，10%であった。

(2) 退学の理由としては，他の大学（すなわち，ほとんどは異なる名称の学部）や専門学校に入りなおすためというものが多く，修学意欲の低下や精神的・心理的問題のゆえというものは少なかった。

(3) 他の大学に入りなおすための退学は入学1年未満に退学する者（1年生）にて高率で，修学意欲低下や精神的問題のゆえによる退学は2年以上在籍して退学する者にて高率であった。

(4) 退学してゆく者は，一般入学試験や大学入試センター試験で「第3志望以下の学校」として入学してきた者（いわゆる「不本意入学者」）にて高率であるが，また推薦入試で入学してきた者においても少なくなかった。

(5) 受験した理由としては，一般入学試験や大学入試センター試験を経て入学しそして退学していった者においては，「他大学が不合格になったときに備えて」「はっきりした動機もなく，なんとなく」といった消極的なものがあげられることが多かった。

1．はじめに

1990年以降，新しい名称を冠した学部が増え続けている。「文学部」や「工学部」といった学部の名称がいったい何種類あるのか数えてみると，1990年までは，1950年46種，1960年53種，1970年59種，1980年71種，1990年91種（○○学群という名称を除く）に過ぎないのに対し，2000年におい

*大妻女子大学　社会情報学部

表1　大学学部数の推移

学部名	1950	'60	'70	'80	'90	'00
教養学部		2	5	6	8	6
文理学部	16	17	8	3	3	2
教育学部	29	28	58	61	61	53
学芸学部	36	32	6	6	6	5
学校教育学部				3	4	3
教育人間科学部						3
教育地域科学部						2
教育福祉科学部						1
教育文化学部						2
文化教育学部						1
文学部	44	71	121	136	149	147
文教育学部	1	1	1	1	1	1
文芸学部		2	2	2	3	3
表現学部						1
神学部	2	5	6	6	6	6
仏教学部	7	8	5	5	5	5
外国語学部	4	10	19	22	32	34
現代中国学部						1
英文学部	2	1				
日本文化学部						1
国際文化学部					2	17
国際文化交流学部						1
国際言語文化学部					1	2
国際言語学部						1
比較文化学部					1	3
国際コミュニケーション学部						6
現代コミュニケーション学部						1
コミュニケーション学部						2
情報文化学部						3
文化情報学部						2
文化創造学部						1
現代文化学部					1	6
文化学部						3
文化政策学部						1
人文科学部						2
人文学部	2	3	13	19	29	52
人文社会学部						4
人文・社会学部						1
人文社会科学部				1	1	1
文政学部	2	1				
文経学部	3	2				
社会学部	2	7	13	13	21	24
行政社会学部					2	2
社会科学部			1	1	2	3
社会文化学部						1
情報社会政策学部						1
総合管理学部						1
現代社会学部						5
心理学部						1
人間学部						7
人間関係学部					1	5
環境人間学部						1
国際関係学部				1	6	7
国際学部					4	11
国際教養学部						1
国際地域学部						1
国際交流学部						1
国際協力学部						1
国際社会学部						1
国際開発学部						1
アジア太平洋学部						1
アジア太平洋マネージメント学部						1

学部名	1950	'60	'70	'80	'90	'00
産業社会学部			1	2	2	4
人間社会学部					1	5
社会福祉学部		3	5	6	9	24
人間福祉学部						2
福祉社会学部						1
総合福祉学部						1
現代福祉学部						1
コミュニティ福祉学部						1
環境情報学部					1	3
環境システム学部						1
法文学部	4	3	6	5	5	6
法学部	19	41	67	86	107	124
現代法学部						1
法経学部	5	8	4	6	5	4
法政策学部						1
政経学部	6	6	5	3	3	3
法政経学部						1
政治経済学部		5	4	4	7	6
国際政治経済学部					1	2
政策学部						1
総合政策学部					1	10
政策情報学部						1
コミュニティ政策学部						1
コミュニティ振興学部						1
地域発展学部						1
経済学部	34	61	115	131	145	167
国際経済学部						2
都市経済学部						2
経済情報学部					1	4
経営経済学部						1
経済科学部						1
経営学部	1	6	29	33	43	68
総合経営学部						1
国際経営学部						1
経営情報学部				1	11	22
経営情報科学部						2
経営文化学部						1
経営政策学部						1
経営法学部						1
情報学部				1	2	6
企業情報学部						1
経営科学部						1
人文経営学部						1
サービス経営学部						1
流通学部						1
流通科学部						2
流通情報学部						1
流通経済学部						1
商学部	17	34	47	48	51	48
国際商学部					1	2
政策科学部						1
地域政策学部						1
地域科学部						1
文商学部	1					
法商学部	1	2				
商経学部	4	11	6	7	8	7
観光学部						3
社会情報学部						5
情報社会科学部						1
都市情報学部						1
地域学部						1
理学部	20	25	40	45	47	49

学部名	1950	'60	'70	'80	'90	'00
情報科学部					1	5
ソフトウェア情報学部						1
情報メディア学部						1
衛生学部			2	2	2	1
生命科学部						2
光科学部						1
地球環境科学部						1
理工学部	5	11	17	16	23	23
環境理工学部						1
総合理工学部						1
環境科学部						2
産業科学技術学部						1
科学技術学部						1
生命理工学部					1	1
生物理工学部						1
応用生物科学部						1
コンピュータ理工学部						1
工学部	51	70	110	123	132	152
基礎工学部			1	1	2	3
生産工学部			1	1	1	1
国際情報学部						3
工芸学部	1	1	1	1	2	2
芸術工学部			1	1	4	4
電気通信学部	1	1	1	1	2	2
情報工学部					1	3
メディア学部						1
システム情報学部						1
応用情報学部						1
数理情報学部						1
医用工学部						1
システム工学部						2
システム科学技術部						1
開発工学部						1
デザイン工学部						1
商船学部	1	2	2	2	2	2
鉱山学部	1	1	1	1	1	
工学資源学部						1
農学部	34	36	36	37	36	34
農学生命科学部						1
園芸学部	1	1	2	2	2	2
獣医畜産学部		1	1	2	2	2
獣医学部		2	2	2	2	3
畜産学部	4	1	2	1	1	1
農獣医学部		1	1	1	1	
酪農学部		1	1	1	1	1
水産学部	5	5	5	6	5	5
生物資源学部					2	3
生物資源科学部						3
地域環境科学部						1
水畜産学部	1	1	1			
海洋学部			1	1	1	1
生物生産学部				1	1	1
生物産業学部					1	1
国際食料情報学部						2
繊維学部	3	3	2	2	3	3
医学部	30	46	50	78	78	78
歯学部	4	7	17	29	29	29
薬学部	18	27	32	42	45	45
保健学部				2	1	2
産業保健学部						1
環境保健学部				1	1	1
保健衛生学部						1

学部名	1950	'60	'70	'80	'90	'00
保健福祉学部						3
保健医療学部						4
保健医療福祉学部						1
医療技術学部						1
医療福祉学部						4
医療衛生学部						1
看護学部				1	4	30
衛生看護学部			1	1		
看護栄養学部						2
看護福祉学部						3
看護福祉心理学部						1
保健科学部						3
栄養学部			4	4	4	4
健康科学部						3
食品栄養科学部					1	1
食文化学部						1
体育学部	3	6	13	12	14	11
スポーツ科学部						1
スポーツ健康科学部						1
芸術学部	2	2	4	4	4	11
美術学部	2	3	5	7	8	7
造形学部			2	2	3	7
造形芸術学部					1	1
造形表現学部						1
デザイン学部						3
美術工芸学部		1	1	1	2	2
美術文化学部						1
芸術情報学部						1
音楽学部	3	10	20	20	22	23
家政学部	10	17	40	39	38	21
服装学部						1
理家政学部	1					
文家政学部	2	4	3	1	1	
生活科学部				3	3	13
生活環境学部						2
環境共生学部						1
環境情報ビジネス学部						1
人間生活学部						2
人間文化学部						8
人間環境学部						5
人間科学部				2	4	9
総合科学部				2	3	3
総合人間学部						1
総合人間・文化学部						2
総合情報学部						3
生涯学習システム学部						1
発達科学部						1
図書館情報学部				1	1	1
鍼灸学部					1	1
不動産学部						2
事業構想学部						1
環境学部						1
環境防災学部						1
第1学群				1	1	1
第2学群				1	1	1
第3学群				1	1	1
医学専門学群				1	1	1
体育専門学群				1	1	1
芸術専門学群				1	1	1

主として夜間において授業を行うコースを待つ学部を含む。『全国大学一覧』各年度版により作成。

ては228種に達する（表１）。各10年間での増加比を算出すると，1950年から1960年にかけては1.2倍，1960年から1970年にかけては1.1倍，1970年から1980年にかけては1.2倍，1980年から1990年にかけては1.3倍と，ほぼ一定しているのに対し，1990年から2000年にかけては2.5倍に達しており，この増加はこの10年間に著明に生じたことが分かる。

こうした1990年以降に作られた学部また改名された学部の名称は，種類が多いことばかりではなく，「総合」とか「現代」，あるいは「情報」とか「環境」といった，漠然としていて，人によってその意味することが異なるような言葉を含むことが多いことも特徴としている。

もちろん，新しい名称であっても，たとえば「生活科学部」や「工学資源学部」のように，それぞれ「家政学部」「鉱山学部」から発展し，家政学や鉱山学といった確立している学問が教えられまた研究されていると容易に推測される学部の場合，あるいは，たとえば「看護福祉学部」のように，看護学と福祉学といった，それぞれ確立し，異なるがしかし近い位置にある学問が関連し合って教えられまた研究されていると容易に推測される学部の場合は，学生においてもまた教員においてもそれほどの問題は起こらないように思われる。

しかし，上に述べた，「総合」や「情報」「環境」といった言葉を含む名称を冠する学部の場合，入学してくる学生は，以下のような様々な問題を抱えやすいのではないか，と推測される。すなわち，１）漠然とした名称であるため，各様に受け取られ，こういうことが学べそうだと期待して入学してきても，実際は異なっていたということが起こるかもしれない，２）そこで教えられる学問が十分には体系化されていないため，授業は脈絡に乏しいものとなり，「私は何を学んでいるのか」が分からなくなり，このことが，つうじょう青年期に自問される「私は何なのか」「私は何になろうとしているのか」といった問題と響き合い，自分を定置することが困難になるかもしれない，３）そもそも，その学部ならではの分野を学ぼうとして入学してくるのではなく，別の理由で（代表的には，他大学の伝統的な学部の入試に失敗したために）入学してくることが多いため，上記２）に述べたことがさらに困難になるかもしれない[1]，４）上記２）３）とも関連し，入学してくる学生は興味や価値観が多様である可能性があり，たとえば保育学科の学生ならば少なくとも子ども好きという点で共通しそうした興味や価値観に沿って学業またサークル活動やボランティア活動に勤しみ，将来に続く時間軸の中でまた人間関係という空間軸の中で自分を定置し易いのに対し，新名称の学部の学生においてはこうしたことが困難となり，結果的にアルバイトにばかり精を出すことになるかもしれない。

もっとも，視点を変えれば，こうした問題は，大学への進学を希望する者は，大学や学部を問わなければ，ほぼ全員が希望を満たせるようになり，学びたい確固としたものを持たないまま進学してくる者も少なくない今日にあっては，他の伝統的な学部においても大なり小なり存在しうることといえるかもしれない。

以上のことを踏まえ，本小論は，1992年４月に第１期生を迎え入れた大妻女子大学社会情報学部における，2002年３月までの10年間の退学者の諸側面を分析しようとするものである。とある女子大学における事例報告に他ならないが，近年増加した，「総合」や「情報」「環境」といった幅広い意味を有する言葉を含む名称の学部が抱える問題，大学への進学希望者が全員入学できる時代の大学が抱える問題を視野に入れるものである。その名称「社会情報（学）」については，そもそも「社会情報学」という一つの体系的な学問がありうるのか否か見解は分かれ，それにともなって社会情報学部は，「社会情報学」を教育・研究する学部である，いや社会学と情報学を教育・研究する学部である，いやその「社会」は社会学ではなく社会科学を意味する，等々，果てしない議論が可能となっている。社会生活情報学専攻，社会環境情報学専攻，社会情報処理学専攻の三専攻に分かれ，『大学ガイド』等によれば，それぞれ，「生活者の視点から，あらゆる情報に対応する能力を

養う」専攻，「社会科学と自然科学の両面から，総合的に環境問題を考える」専攻，「コンピュータを道具として活用できる能力（コンピュータ・リテラシー）を養う」専攻とされている。

ここで，退学を取り上げるのは，一つには，それは，留年や休学などとともに，多くの場合，学生における大学との不適合を表す行動であり，それを分析することによって，学部・大学が抱える問題が浮かび上がりやすいのではないかと考えられること，また，これまで，高校生の退学，大学生の留年については，多くの報告や研究がなされているが，大学生の退学については，いまだ十分とはいえない現状にあること，の二点による。

２．退学者の概要

(1)　退学者数の年次変化

退学とは，いったん入学した者が，規定の年限を終わらずにあるいは規定の単位を取得せずに学校をやめることをいう。しかし，果して「入学した」といってよいのか迷うケースもないわけではない。対象とした大学においては通常，入学試験の後，合格発表，入学金等の納付，入学手続き，入学式，新入生ガイダンス，授業開始，と続いていくが，この一連の流れの中で，入学手続きの後，ある期日までに入学しない旨の届をすれば，「入学を辞退した者」と範疇化される（そして納付金の一部が返還される）。またその届が遅れ入学式の直前になってなされた場合は「入学を取消した者」とされる。形式的には，入学式の直前までにこうした届がなく入学式に出席した者が「入学者」となる。しかし，まれながら，入学式に欠席し，こうした届が入学式直後になされることもあり，この場合も，さかのぼって「入学を取消した者」として扱われる。しかしさらに，ごくまれながら，入学式に欠席し，それ以降もずっと欠席し，数か月後に『退学願』を提出したり，あるいは，入学式には出席するものの，まもなく『休学願』を提出し，（それから再受験のための勉強をして他大学に合格したのであろう）翌年２月ごろに『退学願』を提出するといった者もいる。こうした学生は，授業にほとんど出席しておらず，そもそも「入学した」といってよいのか疑問ではある。しかし，現実には，授業の出席状況が完全に把握されているわけではない以上，授業に出席して退学していったのか，授業にほとんど出席せずして退学していったのか，見分けるのは困難である。こうしたことから本小論で分析する「退学者」の中には，ごくまれではあるが，こうした者も含まれていることをお断りしておきたい。

さて，対象とする学部において，1992年（平成４年）４月８日に１期生が入学して以来，2002年４月１日までにおける退学者は143名を数える。入学した者のほぼ全員が卒業してしまっている1992年度から1998年度までの入学者についてみれば，退学者の割合は入学した者の4.4%に当たる。表２にその年次変化を示す。ここで年次変化をみるという場合，たとえば平成10年（度）に入学した者のうちどのくらいの者が退学していったかを数えるやり方と，平成10年（度）に在籍している者のうちどのくらいの者が退学していったかを数えるやり方と，二つあり，前者からは入学した年の，また後者からは退学した年の，学生や大学をとりまく環境が，浮かび上がってきやすいと思われる。それぞれ一長一短あるが，表２においては，前者を採る。それは，一つには，退学する者の中には，それ以前に数か月から数年のあいだ休学していた者（別の言い方をすれば，数か月から数年休学したあと退学する者）がおり，そうした者においては，もし後者のやり方で検討するとするならば，退学した年よりも休学を始めた年が問われるべきと考えられること，また一つには，先にも述べたように，数々の大学において新名称を含むさまざまな名称の学部の開設が相次ぎ，それにともなって入学年次によって入学者の関心や志向が少し異なるのではないかと推測されることのゆえである。

しかし，このような配慮をもって作成した表ではあったが，入学年次によって退学者の人数や割合に著明な違いは見いだすに至らなかった。さまざまな解釈が可能であるが，後に（表７）示すように，他の大学の，おそらくは伝統的な多様な学

表2　専攻別・入学年次別の退学者数

(2002年4月1日現在)

専攻	入学年次	期	入学者数	退学者数(%)	備　考
社会生活情報学専攻	1992年（平成4年）	1	114	5　(4.4)	
	1993年（平成5年）	2	110	5　(4.5)	
	1994年（平成6年）	3	109	5　(4.6)	
	1995年（平成7年）	4	108	6　(5.6)	
	1996年（平成8年）	5	122	6　(4.9)	
	1997年（平成9年）	6	109	3　(2.8)	
	1998年（平成10年）	7	112	5　(4.5)	
	1999年（平成11年）	8	116	4+　(3.4+)	多くは4年生
	2000年（平成12年）	9	110	4+　(3.6+)	多くは3年生
	2001年（平成13年）	10	120	3+　(2.5+)	多くは2年生
社会環境情報学専攻	1992年（平成4年）	1	113	5　(4.4)	
	1993年（平成5年）	2	110	7　(6.4)	
	1994年（平成6年）	3	109	6　(5.5)	
	1995年（平成7年）	4	111	1　(0.9)	
	1996年（平成8年）	5	111	6　(5.4)	
	1997年（平成9年）	6	112	6　(5.4)	
	1998年（平成10年）	7	107	6+　(5.6+)	1名在籍中
	1999年（平成11年）	8	119	9+　(7.6+)	多くは4年生
	2000年（平成12年）	9	106	7+　(6.6+)	多くは3年生
	2001年（平成13年）	10	94	2+　(2.1+)	多くは2年生
社会情報処理学専攻	1992年（平成4年）	1	114	3　(2.6)	
	1993年（平成5年）	2	115	5　(4.4)	
	1994年（平成6年）	3	115	3　(2.6)	他に除籍1名
	1995年（平成7年）	4	114	6　(5.3)	
	1996年（平成8年）	5	123	3+　(2.4+)	1名在籍中
	1997年（平成9年）	6	112	3　(2.7)	
	1998年（平成10年）	7	115	8+　(7.0+)	1名在籍中
	1999年（平成11年）	8	117	5+　(4.3+)	多くは4年生
	2000年（平成12年）	9	119	2+　(1.7+)	多くは3年生
	2001年（平成13年）	10	104	4+　(3.8+)	多くは2年生

+まだ在籍している者がおり，数値が増加する可能性があることを示す。

部の，入学試験に失敗したために入学してくるという者が少なくない場合，他の大学における新名称の学部の開設の影響はそれほど大きくないのかもしれない。

(2)　入学から退学までの期間

つぎに，入学から退学までの期間を検討しよう。退学するか否かは次の学期の授業料を納付するか否かと密接にかかわることから，退学は各学期（前期・後期）の末日付けとなることが多くなっている。このことを考慮し，入学から退学までの期間（休学した期間がある場合，その期間も含める）を半年刻みで分けて集計した（表3）。その結果，入学後1年未満（すなわち1年生終了

表３　専攻別の退学者の入学から退学までの期間

	半年未満	１年未満	１年半未満	２年未満	２年半未満	３年未満	３年半未満	３年半以上	計
社会生活情報学専攻	7(20.0)	10(28.6)	5(14.3)	8(22.9)	1(2.9)	3(8.6)	0(0.0)	1(2.9)	35(100%)
社会環境情報学専攻	4(10.8)	13(35.1)	7(18.9)	2(5.4)	2(5.4)	5(13.5)	0(0.0)	4(10.8)	37(100%)
社会情報処理学専攻	6(19.6)	8(25.8)	1(3.2)	7(22.6)	2(6.5)	1(3.2)	2(6.5)	4(12.9)	31(100%)

集計：1992～1998年度に入学し1992～2001年度に退学した者について。　（　）内は%

注意：①入学式（４月７日）以降，前期中（同年９月20日まで）に――通常は９月20日付で――退学をした場合を「半年未満」，後期中（９月21日～翌年３月31日）に――通常は３月31日付で――退学した場合を「１年未満」とする。「１年半未満」「２年未満」などについても同様。

②いったん休学しその後退学した場合，「入学から退学までの期間」にはその休学期間も含まれている。

③表２から分かるように，社会環境情報学専攻と社会情報処理学専攻において，４年以上在籍しまだ卒業していない者がそれぞれ１名と２名いる。このうち数名が退学することになれば，表中の「３年半以上」の人数と比率が増えることになる。

時まで）に退学する者，１年以上２年未満在籍して（すなわち，通常は２年生終了時までに）退学する者，２年以上３年未満在籍して退学する者，３年以上在籍して退学する者，の全退学者における割合は，それぞれ，ほぼ45%，30%，15%，10%で，退学者の出現は入学２ないし３年後にて一段落するということができた。専攻別にみると，社会生活情報学専攻よりも，社会環境情報学専攻と社会情報処理学専攻の学生において，３年以上在籍して退学するという者が，わずかに多いことも認められた。

ところで，退学する者は，授業への出席度という観点からすれば，１）授業に普通に出席しあるとき急に『退学願』を提出する者，２）授業に欠席しがちで『退学願』を提出する者，３）いったん『休学願』を提出して休学し数か月後から数年後に『退学願』を提出する者，の３者に分けられる。しかし先にも述べたように，出席状況が完全には把握されず前２者は区別できないことから，ここでは前２者をまとめ，すなわち，休学をしない（『休学願』を提出しない）で『退学願』を提出する者と，いったん休学し（『休学願』を提出し）数か月後から数年後に『退学願』を提出する者，の２群に分けると，後者のタイプは，1992～1998年度の入学者では，社会生活情報学専攻の退学者（退学者35名中３名，8.6%）よりも，社会環境情報学専攻（37名中９名，24.3%）や社会情報処理学専攻（31名中10名，32.3%）の退学者の方が高率であることが認められた。つまり，後２専攻では，いったん休学しその後結局は退学に至るという過程を踏む者が少なくないため「入学から退学までの期間」が長い学生が多いという結果をもたらしているといえるだろう。

この「いったん休学しその後結局は退学に至る」者の特徴は次項で述べたい。

ここで，社会情報処理学専攻において，「入学から退学までの期間」が長いこと，また，退学には至らないものの長期間在籍している者がいること（表２）は，十分注意を払う必要があろう。先に（若林ら，1993），同専攻の学生（１年生）は，平均値の上では心的に安定していることを示したが，個々についてみれば，コンピュータに親和性が強く現実の人間関係づくりが苦手な学生がいる可能性，高校にてそれほど数学を勉強しなかったにもかかわらず，大学にて，数学やプログラミングといった，しかも学んだことが積み上げられていくという性格の強い科目を履修することになり，同専攻での学びについていけない学生がいる可能性，といったことが推測されよう。

(3)　退学の理由

ここで，退学の理由をまとめておきたい。対象

となった学部の大学では，退学しようとする者は『退学願』を提出するが，そのなかで「退学の理由」を具体的に書くことになっている。また，応対した事務職員はやや詳しく理由を尋ね，時には，その内容を同『願』にメモ書きすることもなされている。事務上は，理由は，最終的には「進路変更」「一身上の都合」「病気治療」「在籍期間満了」の四つに区分されてしまうのであるが，こんかい，この「退学の理由」とメモ書きとを通覧し，理由を表4に示すように細かく分類した。ここで，「修学意欲低下」とは，学校での勉学それ自体への興味を失い，今後学校にはゆかず，たと

表4　専攻別の退学の理由

	社会生活情報学専攻		社会環境情報学専攻		社会情報処理学専攻	
修学意欲低下	4(8.7)		2(3.6)		4(9.5)	
進路変更［他大学(英語専攻) へ］	4(8.7)		0(0.0)		0(0.0)	
進路変更［他大学(経済学，経営，商学など専攻) へ］	2(4.3)		3(5.5)		4(9.5)	
進路変更［他大学(社会学，観光，放送など専攻) へ］	3(6.5)		1(1.8)		0(0.0)	
進路変更［他大学(法律専攻) へ］	1(2.2)		0(0.0)		0(0.0)	
進路変更［他大学(保育，教育，看護，福祉など専攻)へ］	2(4.3)		3(5.5)		4(9.5)	
進路変更［他大学(薬学，環境，食品など専攻) へ］	0(0.0)		4(7.3)		1(2.4)	
進路変更［他大学(コンピュータ，数学など専攻) へ］	0(0.0)	25(54.3)	1(1.8)	22(40.0)	2(4.8)	20(47.6)
進路変更［他大学(デザイン，音楽など専攻) へ］	2(4.3)		0(0.0)		0(0.0)	
進路変更［他大学(園芸，美容，被服，動物など専攻)へ］	0(0.0)		0(0.0)		1(2.4)	
進路変更［他大学(人文社会科学総合[a]) へ］	3(6.5)		4(7.3)		2(4.8)	
進路変更［他大学(他の文系学部[b]または[文系]とのみ記載)へ］	8(17.4)		4(7.3)		2(4.8)	
進路変更［他大学(「理系」「家政系」とのみ記載) へ］	0(0.0)		2(3.6)		4(9.5)	
進路変更［専門学校(法律専攻) へ］	0(0.0)		0(0.0)		1(2.4)	
進路変更［専門学校(保育，教育，看護，福祉など専攻)へ］	1(2.2)		5(9.1)		2(4.8)	
進路変更［専門学校(コンピュータ，数学など専攻)へ］	2(4.3)	6(13.0)	0(0.0)	9(16.4)	0(0.0)	4(9.5)
進路変更［専門学校(デザイン，音楽など専攻) へ］	2(4.3)		2(3.6)		0(0.0)	
進路変更［専門学校(園芸，美容，被服，動物など専攻)へ］	1(2.2)		2(3.6)		1(2.4)	
進路変更［留学（英語)］	0(0.0)		3(5.5)		2(4.8)	
進路変更［ただし進路不明］	4(8.7)		4(7.3)		1(2.4)	
進路を再検討・学びたい分野と違う	1(2.2)		3(5.5)		1(2.4)	
人間関係・雰囲気が合わない	1(2.2)		1(1.8)		2(4.8)	
健康上の理由(身体的問題)	0(0.0)		2(3.6)		0(0.0)	
健康上の理由(精神的・心理的問題)	2(4.3)		3(5.5)		4(9.5)	
健康上の理由(身体的問題か精神的心理的問題か不明)	1(2.2)		0(0.0)		0(0.0)	
経済上の理由	1(2.2)		2(3.6)		3(7.1)	
家族を看病・介護するため	0(0.0)		1(1.8)		0(0.0)	
就職するため	0(0.0)		1(1.8)		0(0.0)	
他の活動と両立不可のため	0(0.0)		2(3.6)		0(0.0)	
「一身上」とのみ記載	1(2.2)		0(0.0)		1(2.4)	
計	46(100%)		55(100%)		42(100%)	

集計：1992～2001年度に入学し1992～2001年度に退学した者について。　( ) 内は%

備考：[a]総合政策学部，社会情報学部など。

[b]文化学，教養学部など。

えばフリーターとなって日々を送るつもりでの退学を指す。また，「健康上の理由（精神的・心理的問題）」には，“ストレス”など，精神科受診の必要のないと推測される水準のものも含まれている。

もっとも，陳述された理由については少なくとも二つの問題があろう。一つには，理由を尋ねても当たり障りのないことが回答されやすいということである。たとえば，「なぜ退学するか」を詮索されたくない者は「父の会社がうまくいかず経済的余裕がないので」と，自分以外の事情のせいにし易いだろう。また「今後，どこの大学に行くのか」を詮索されたくない者は「いくつか大学に受かっているけど，どこに行くかはまだ決めていない」と答え易いだろう。

また一つには，理由は複合していること，あるいは陳述された理由にはさらに背景や遠因といったものがあるということである。たとえば，人間関係がうまく築けなかったために他の大学に移ることで解決を図ろうという者は，そうした背景は述べず，ただ単に「○△大学に入りなおすので」と答え易いだろう。

このように陳述された理由は真相を百パーセント表しているわけではない。かといって百パーセント誤りというわけではもっとないだろう。ここでは，とりあえずは，学生の陳述をそのまま受け取って分析し，しかし何事かが隠されているかもしれないということに気を配ることとしたい。

さて，表４を見ると，退学の，約６割もが他の学校に（多くはその入学試験に合格して）入りなおすための退学であること，これに「進路を再検討」や「学びたい分野と違う」といった，未だ入りなおす先は決まっていないがいずれは他の学校に入りなおそうと考えての退学を加えると，結局約７割以上が他の学校に入りなおそうとするための退学であることが分かった。その入りなおす学校として，大学に限らず専門学校も選ばれていること，また，学ぶ分野――それはきわめて多様なのであるが，そしてその多様であることはおそらくは元々学びたいと思っていた分野が多様であることを示唆するのであるが――として，いっぱんに女性に向いていると見なされ，職業と結びつき，かつ資格制度のある保育，看護，福祉といった分野や，あるいはデザインや音楽といった芸術系の分野が選ばれていることが印象的である。

この入りなおす先については，わずかながら専攻による違いも認められた。すなわち，英語，また社会学や観光あるいは放送の学科や学部に行くという者は社会生活情報学専攻の学生に，薬学や環境学あるいは食品の学科や学部に行くという者は社会環境情報学専攻の学生に，それぞれ多いのであった。また意外なことに，保育，看護，福祉などの学科や学部に行くという者は，社会生活情報学専攻よりも社会環境情報学専攻や社会情報処理学専攻の学生の方がわずかに多いことも認められた。いずれの場合でも，自分が関心をもっている分野は自分が所属する専攻では十分学べないと認識されたという点では，同じであった。

なお，「進路変更［ただし進路不明］」と表記されるものの中には，進路を変えるために退学するがその進路がいまだ定まっていない（つまり，入りなおす大学や専門学校がない）という例も少なからず含まれている。形式的には，同じく，「進路変更」とまとめられるが，他の大学などに入りなおすことが決定している者と少し意味合いが異なる。

ここで精神的・心理的問題を理由とする退学の多寡に興味がもたれるが，残念ながら，比較しうる他の大学あるいは学部の資料がなく，多いとも少ないとも言えなかった。いずれそういう機会が来ることを待ちたい。

さて，では，この，退学の理由と，先に集計した「入学から退学までの期間」との間に，何か関連はあるだろうか。集計してみると（表５），退学者のうち，他の大学や専門学校に入りなおすためという者は，入学して最初の１年間に退学していく者に多く（入学後１年未満に退学する者の約８割），その後減少してゆくことが認められた。詳細に見ると，同じ入りなおすといっても，他の大学に入りなおすという者は，入学後１年未満に退学してゆく者（つまり１年生の時に退学してゆく者）では53名，１年以上２年未満の者（つまり

表5　入学から退学までの期間と退学の理由

	1年未満	1年以上 2年未満	2年以上 3年未満	3年以上
修学意欲低下	1(1.3)	4(9.5)	2(13.3)	3(27.3)
進路変更［他大学へ］（計）	53(66.7)	13(31.0)	3(20.0)	1(9.1)
進路変更［専門学校へ］（計）	8(10.7)	10(23.8)	0(0.0)	1(9.1)
進路変更［留学（英語）］	3(4.0)	2(4.8)	0(0.0)	0(0.0)
進路変更［ただし進路不明］	3(4.0)	4(9.5)	2(13.3)	0(0.0)
進路を再検討・学びたい分野と違う	2(2.7)	1(2.4)	2(13.3)	0(0.0)
人間関係・雰囲気が合わない	2(2.7)	1(2.4)	0(0.0)	1(9.1)
健康上の理由（身体的問題）	0(0.0)	1(2.4)	1(6.7)	0(0.0)
健康上の理由（精神的・心理的問題）	4(5.3)	1(2.4)	2(13.3)	2(18.2)
健康上の理由（身体的問題か精神的心理的問題か不明）	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	0(0.0)
経済上の理由	2(2.7)	2(4.8)	1(6.7)	1(9.1)
家族を看病・介護するため	0(0.0)	1(2.4)	0(0.0)	0(0.0)
就職するため	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(9.1)
他の活動と両立不可のため	0(0.0)	0(0.0)	1(6.7)	1(9.1)
「一身上」とのみ記載	0(0.0)	2(4.8)	0(0.0)	0(0.0)
計	75(100%)	42(100%)	15(100%)	11(100%)

集計：1992～2001年度に入学し1992～2001年度に退学した者について。　（　）内は%

表6　休学後の退学か否かと退学の事由

	退学	いったん休学しその後に退学
修学意欲低下	7(6.1)	3(10.3)
進路変更［他大学へ］（計）	57(50.0)	10(34.5)
進路変更［専門学校へ］（計）	17(14.9)	2(6.9)
進路変更［留学（英語）］	2(1.8)	3(10.3)
進路変更［ただし進路不明］	8(7.0)	1(3.4)
進路を再検討・学びたい分野と違う	3(2.6)	2(6.9)
人間関係・雰囲気が合わない	3(2.6)	1(3.4)
健康上の理由（身体的問題）	2(1.8)	0(0.0)
健康上の理由（精神的・心理的問題）	3(2.6)	6(20.7)
健康上の理由（身体的問題か精神的心理的問題か不明）	1(0.9)	0(0.0)
経済上の理由	5(4.4)	1(3.4)
家族を看病・介護するため	1(0.9)	0(0.0)
就職するため	1(0.9)	0(0.0)
他の活動と両立不可のため	2(1.8)	0(0.0)
「一身上」とのみ記載	2(1.8)	0(0.0)
計	114(100%)	29(100%)

集計：1992～2001年度に入学し1992～2001年度に退学した者について。　（　）内は%

通常は２年生の時に退学してゆく者）では13名と，前者が圧倒的に多いのに対し，専門学校に入りなおすという者は，１年生の時に退学してゆく者では８名，２年生の時に退学してゆく者では10名と，後者が多くなる。大雑把にいえば，１年生が退学して入りなおすという場合，その学校としてまず他の大学が選ばれるが，２年生が退学して入りなおすという場合，その学校として大学と専門学校の両方が候補となる，ということになろう。２年生の場合，改めて他の大学で１年から学び直すことに対する抵抗感，受験勉強をした時期から時間的に遠ざかったことから来る受験への不安感が，この進路選択に作用していると推測される。

こうした他の学校に入りなおすためという者と異なり，「修学意欲低下」すなわち学校での勉学それ自体に興味を失って退学してゆく者は，最初の１年間においては少ないが，入学後年数が経つにつれある一定数出現することが認められた。他の学校に入りなおすために退学するという者が入学２年後まででほぼ一段落するために，２年以上の在籍者で目立つようになっていた。

さて，先に，退学する者を，休学を経ない（『休学願』を提出しない）で『退学願』を提出する者と，いったん休学し（『休学願』を提出し）数か月後から数年後に『退学願』を提出する者，に分けたが，他の学校（大学または専門学校）に入りなおすために退学という者においては前者が74名，後者が12名と，前者すなわち休学を経ないで退学する者が多いのに対し，精神的心理的問題のゆえに退学する者においては前者が３名，後者が６名と，後者すなわち休学を経て退学する者が多いことが認められた（表６）。精神的問題のゆえにいったん休学し，問題が解決して再度学校に通えるようになることを期するが，それがかなわず退学する，という過程が推測されよう。

３．入学試験を受けた理由――入学時のアンケート調査の分析

対象となった学部においては，第１期生以来，全学生に，志望順位や受験の理由（動機）や授業への関心などを尋ねるアンケート調査と，〈その２〉で述べるSCT（文章完成法）が，第１期生と第２期生については２学年進級時のガイダンスにて，また第３期生以降の学生については入学時の新入生ガイダンスにて，行われている。

本節では，その後退学していく者は，入学時のアンケート調査で，志望順位や受験の理由（動機）に関していかなる回答をしたのかみていきたい。もし何らかの特徴が見いだせるならば，退学するか否か予測も可能となるかもしれない。

もっとも，最初に触れたように，本小論で「退学した者」とされる者の中には，入学式や新入生ガイダンスを欠席し，授業にほとんど出席しないまま『退学願』を提出する者も，ごくわずかではあるが，含まれている。このような者は，当然ながらアンケート調査を受けておらず，したがって本節で分析する対象者には含まれていないことに注意してほしい。また，アンケート調査は入学時に施行され，しかも回答者には学籍番号の記載が求められており，回答者が幾分肯定的に回答しようとした可能性もありうることにも注意してほしい。

なお，上述したように，アンケート調査が入学時に行われるようになったのは，第３期生（1994年入学）以降である。また，仮に退学者の出現が入学後２年間で落ち着くとすれば，集計時点（2002年４月）で退学者の出現がほぼ落ち着いたといえるのは，2000年に入学した第９期生までである。この２点から，本節では，第３期生から第９期生まですなわち1994年から2000年までに入学した者について検討することにしたい。第１期生と第２期生を含む，全学生についての調査結果の概要については，前納ら（2002）を参照してほしい。

以下，志望順位と受験した理由について検討する。

(1)　受験の際の志望順位

志望順位に関しては，よく「第１志望」という言い方がなされる。しかし，これは，実は，必ず

しも明快な言葉とはいえない。というのも，それは，受験した学校の中での第１志望なのか，受験しなかった学校を含めた中での第１志望なのか，明らかではないからである。一般的には，前者，すなわち受験した学校の中でもっとも行きたい学校のことをいうが，後者の受け取り方もありうることは，推薦入試を経て入学してきた者に第１志望校を尋ねても，必ずしもその大学が挙げられるとは限らないことからもわかる。つまり，受験校を選ぶ段階で，すでに本当の第１志望校を選ばないということも多いのである。つうじょう，受験生は，受験が近づくと，模擬試験で合格点に達しない，親元から通えない，授業料が高い，就職率が低い，といったさまざまの理由から受験する学校を変え，それにともなって第１志望校も次々に変えていくのであり，やはり第１志望校とは曖昧な言葉であるといえよう。こうしたことから，実は，「不本意入学」もそれほど明快な言葉ではない。

ともあれ，今ある資料に基づくしか方法がない場合，退学の理由の項でも述べたように，とりあえずは，第１志望か否か回答者が述べたことをそのまま受け取って分析し，しかしさまざまな背景があることに気を配ることとしたい。

さて，退学者と，参考のため全学生（入学者），の志望順位をそれぞれ集計すると，表７が得られた（本来ならば退学者と非退学者とを比較すべきであろうが，現時点で在籍中の者すなわち非退学者とされる者の中からも今後退学していく者がでてくる可能性が多分にあり，つまり非退学者が未だ確定されないことから，退学者と全学生を比較することにした）。この表を見ると，一般入学試験・大学入試センター試験で第３志望以下の学校として受験し入学してきた，つまり第１志望校，第２志望校の入試に失敗して入学してきたであろう者にて退学者がやや高率であることが分かる。

しかし，この表から言及されなければならないより重要なことは，一般入学試験・大学入試センター試験で第１志望校として入学してきた者，また推薦入試を経て——すなわち第１志望として推薦を受けて——入学してきた者においても，退学してゆく者が決して皆無ではないということである。一体全体，第１志望校として入学したにもかかわらず結局は退学してゆく者は何故その大学を受験し進学先として選んだのであろうか。しかしこのことに触れる前に，第１志望校として入学してきた者はどういう理由で退学していったのか，見ておこう。

志望順位別に退学の理由を集計すると（表８），少人数の分布となり，安定した傾向を見出すにはほど遠いが，少なくとも３つのことが注目されよう。すなわち，上述したように，一般入学試験・大学入試センター試験を受け，第１志望校として入学したにもかかわらず，退学してゆく者がいるが，その全員（５名中５名）が「進路変更」や「進路再検討」を理由としていること，推薦入試で，すなわち同様に第１志望校として入学したにもかかわらず，退学してゆく者においても，「進路変更」「進路再検討」という理由が少なくないこと，第三に，同じく推薦入試で入学したにもかかわらず退学して行く者において，「修学意欲低下」や「精神的心理的問題」という理由も決して少なくはないこと，の三点である。専攻によって事情は異なり，また退学に至るまでの心的過程が把握されておらず，即断は避けなければならないが，１）こんなことが学べそうだと期待して，第１志望校として入学してきたが，実際は異なっていたため，他の学校に入りなおす，２）こんなことが深く学べそうだと期待して，第１志望校として入学してきたが，実際は異なっていたため，他の学校に入りなおす，３）一般入試，推薦入試を問わず，学びたいことを棚上げにして，とにかくどこかの大学に入学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第１志望校として入学するが，入学後にその学びたかったことへの思いが高まり，他の学校に入りなおす，４）そもそも特に学びたいことをもたず，とにかくどこかの大学に入学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第１志望校として入学するが，入学後に学びたいことが見つかり，他の学校に入りなおす，５）同じく，特に学びたいことをもたず，とにかくどこかの大学に入

表7　進学した大学の志望順位と退学（入学時のアンケート調査による）

		社会生活情報学専攻	社会環境情報学専攻	社会情報処理学専攻	計
		退学者[b]／入学者[a]（%）	退学者[b]／入学者[a]（%）	退学者[b]／入学者[a]（%）	退学者[b]／入学者[a]（%）
一般入学試験・大学入試センター試験*	第1志望	2／ 79（2.5）	5／ 79（6.3）	2／ 88（2.3）	9／246（3.7）
	第2志望	1／ 88（1.1）	8／ 94（8.5）	1／ 96（1.0）	10／278（3.6）
	第3志望以下	17／316（5.4）	22／335（6.6）	16／318（5.0）	55／969（5.7）
推　薦　入　試**		9／285（3.2）	4／232（1.7）	7／275（2.5）	20／792（2.5）

[a]正確には，1994～2000年度に入学し入学時のアンケートに回答した者。
[b]正確には，1994～2000年度に入学し入学時のアンケートに回答した者のうちで，1994～2001年度に退学した者。
*帰国子女入試を含む。
**大妻女子大学併設・関連高校推薦入試，指定校推薦入試，公募推薦入試，同窓会員子女推薦入試。

表8　進学した大学の志望順位と退学の理由（入学時のアンケート調査による）

			修学意欲低下	進路変更［大学へ］	進路変更［専門学校へ］	進路変更［留学］	進路変更［進路不明］	進路再検討・学びたい分野と違う	人間関係・雰囲気が合わない	精神的心理的問題	経済上の理由	その他	計
社会生活情報学専攻[a]	一般入学試験・大学入試センター試験*	第1志望	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（50.0）	0（ 0.0）	1（50.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	2（100%）
		第2志望	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（100 ）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（100%）
		第3志望以下	1（ 5.9）	14（82.4）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（ 5.9）	0（ 0.0）	1（ 5.9）	0（ 0.0）	17（100%）
	推　薦　入　試**		2（22.2）	2（22.2）	2（22.2）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（11.1）	0（ 0.0）	1（11.1）	0（ 0.0）	1（11.1）	9（100%）
社会環境情報学専攻[a]	一般入学試験・大学入試センター試験*	第1志望	0（ 0.0）	2（40.0）	2（40.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（20.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	5（100%）
		第2志望	2（25.0）	1（12.5）	2（25.0）	1（12.5）	0（ 0.0）	1（12.5）	1（12.5）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	8（100%）
		第3志望以下	0（ 0.0）	11（50.0）	4（18.2）	1（ 4.5）	2（ 9.1）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（ 4.5）	3（13.6）	22（100%）
	推　薦　入　試**		0（ 0.0）	1（25.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（25.0）	1（25.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（25.0）	0（ 0.0）	4（100%）
社会情報処理学専攻[a]	一般入学試験・大学入試センター試験*	第1志望	0（ 0.0）	1（50.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（50.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	2（100%）
		第2志望	0（ 0.0）	1（100 ）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	1（100%）
		第3志望以下	0（ 0.0）	8（50.0）	3（18.8）	1（ 6.3）	1（ 6.3）	0（ 0.0）	1（ 6.3）	0（ 0.0）	2（12.5）	0（ 0.0）	16（100%）
	推　薦　入　試**		2（28.6）	2（28.6）	1（14.3）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	2（28.6）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	7（100%）

[a]正確には，1994～2000年度に入学し入学時のアンケートに回答した者のうちで，1994～2001年度に退学した者。　（　）内は%
*帰国子女入試を含む。
**大妻女子大学併設・関連高校推薦入試，指定校推薦入試，公募推薦入試，同窓会員子女推薦入試。

学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第1志望校として入学するが，結局は学校での勉学そのものに意欲を失い，退学する，といった過程が推測されよう。

⑵ 受験した理由

今度は，受験した理由（動機）について分析したい。その後退学してゆく者はそもそもいかなる理由で入学試験を受けたのであろうか。「この社会情報学部を受験した動機は何ですか」という質問で，計10の選択肢から「3つ以内」の選択を求めて得られた回答を集計した（表9）。

ところで，受験した理由は，専攻によって少し異なり，また，一般入学試験や大学入試センター試験によるか推薦入試によるかによって，あるいは，ほぼ重なることであるが志望順位によって，大きく異なる。こうしたことから，一般入学試験・大学入試センター試験による者と推薦入試による者を分けて，それぞれ考察を加えることにしよう。

まず，一般入学試験・大学入試センター試験を経て入学してきた者についてである。

概して，一般入学試験・大学入試センター試験を経て入学してきた者は，推薦入試を経て入学してきた者よりも，「他大学が不合格になったときに備えて」「自分の学力水準に合致すると思ったので」「周りの人の勧めで」「はっきりした動機もなく，なんとなく」といった消極的な理由（動機）が高率である（表9）。ここで「はっきりした動機もなく，なんとなく」「周りの人の勧めで」という回答が高率であることは理解に苦しむところであるが，第3志望以下の学校，いわゆる「滑り止め」の学校として受験されたのであろうと考えると，うまく理解できる（このことは，多義的な名称の学部は，このような候補になりうるということを示唆している）。

ここで，試しに，専攻に分けず，受験の理由別に退学者の割合を算出すると，「はっきりした動機もなく，なんとなく」という受験理由の者においては9.4%（127名中退学した者は12名），以下，順に，「周りの人の勧めで」という者で6.8%（336名中23名），「他大学が不合格になったときに備えて」という者で5.9%（663名中39名），「何か新しい分野の勉強ができると思ったので」という者で5.0%（539名中27名），「自分の学力に合致すると思ったので」という者で4.6%（526名中24名），「自分の希望する専攻分野があったので」という者で4.4%（794名中35名），「大学の学風・雰囲気にひかれて」という者で3.0%（369名中11名），「就職に有利な勉強ができると思ったので」という者で3.0%（575名中17名），となる（ただし受験の理由は複数回答形式で尋ねられたものであり，解釈に当たっては少なからずの注意を要する）。この結果は，先に示した，志望順位が低い者にて退学者が高率であるということを，反映するものといえよう。

では，推薦入試を経て入学してきた者はどうであろうか。

概して，推薦入試を経て入学してくる学生は，一般入学試験や大学入試センター試験を経て入学してくる者よりも，「自分の希望する専攻分野があったので」「何か新しい分野の勉強ができると思ったので」「就職に有利な勉強ができると思ったので」「本学の学風・雰囲気にひかれて」といった積極的な回答が高率であることが認められている（もちろん，第1志望として推薦を受けた彼らに「他大学が不合格になったときに備えて」や「はっきりした動機もなく，なんとなく」といった理由がえらばれることはありえず，結果的にこうした理由が選ばれたということも推測される）。

上と同様に，受験の理由別に退学者の割合を算出すると，「周りの人の勧めで」という者で3.1%（130名中退学した者は4名），以下，順に，「自分の希望する専攻分野があったので」という者で2.9%（555名中16名），「自分の学力水準に合致すると思ったので」という者で2.7%（113名中3名），「就職に有利な勉強ができると思ったので」という者で2.4%（421名中10名），「本学の学風・雰囲気にひかれて」という者で2.3%（266名中6名），「何か新しい分野の勉強ができると思ったので」という者で1.3%（456名中6名），「はっきり

表9　進学した大学を受験した理由（入学時のアンケート調査による）

				進学した大学を受験した理由****										
				自分の希望する専攻分野があったので	何か新しい分野の勉強ができると思ったので	就職に有利な勉強ができると思ったので	本学の学風・雰囲気にひかれて	他大学が不合格になったときに備えて	自分の学力水準に合致すると思ったので	周りの人の勧めで	はっきりした動機もなく，なんとなく	進学相談会の情報が良かったので	その他	不明（無記入）
入学した者全員[a]			[N＝2303]	1349(58.6)	995(43.2)	996(43.2)	635(27.6)	676(29.4)	639(27.7)	466(20.2)	152(6.6)	45(2.0)	128(5.6)	15(0.7)
入試別	一般入試*	社会生活情報学専攻	[N＝ 488]	264(54.1)	189(38.7)	192(39.3)	124(25.4)	210(43.0)	177(36.3)	100(20.5)	43(8.8)	4(0.8)	27(5.5)	1(0.2)
		社会環境情報学専攻	[N＝ 514]	271(52.7)	183(35.6)	155(30.2)	130(25.3)	237(46.1)	181(35.2)	112(21.8)	49(9.5)	8(1.6)	37(7.2)	3(0.6)
		社会情報処理学専攻	[N＝ 509]	259(50.9)	167(32.8)	228(44.8)	115(22.6)	216(42.4)	168(33.0)	124(24.4)	35(6.9)	11(2.2)	21(4.1)	3(0.6)
	推薦入試*	社会生活情報学専攻	[N＝ 285]	192(67.4)	174(61.1)	150(52.7)	97(34.0)	2(0.7)	37(13.0)	49(17.2)	6(2.1)	8(2.8)	14(4.9)	3(1.1)
		社会環境情報学専攻	[N＝ 232]	163(70.3)	149(64.2)	96(41.4)	86(37.1)	4(1.7)	38(16.4)	37(15.9)	6(2.6)	8(3.4)	9(3.9)	2(0.9)
		社会情報処理学専攻	[N＝ 275]	200(72.7)	133(48.4)	175(63.6)	83(30.2)	7(2.5)	38(13.8)	44(16.0)	13(4.7)	6(2.2)	20(7.3)	3(1.1)
退学した者全員[b]			[N＝ 94]	49(52.1)	33(35.1)	27(28.7)	17(18.1)	41(43.6)	25(26.6)	28(29.8)	12(12.8)	2(2.1)	11(11.7)	1(1.1)
入試別	一般入試*	社会生活情報学専攻	[N＝ 20]	9(45.0)	6(30.0)	5(25.0)	3(15.0)	13(65.0)	6(30.0)	4(20.0)	6(30.0)	0(0.0)	3(15.0)	0(0.0)
		社会環境情報学専攻	[N＝ 35]	18(51.4)	14(40.0)	4(11.4)	5(14.3)	15(42.9)	12(34.3)	11(31.4)	5(14.3)	1(2.9)	4(11.4)	1(2.9)
		社会情報処理学専攻	[N＝ 20]	8(40.0)	7(35.0)	8(40.0)	3(15.0)	11(55.0)	6(30.0)	8(40.0)	1(5.0)	1(5.0)	1(5.0)	0(0.0)
	推薦入試*	社会生活情報学専攻	[N＝ 9]	6(66.7)	2(22.2)	4(44.4)	4(44.4)	2(22.2)	0(0.0)	3(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(11.1)	0(0.0)
		社会環境情報学専攻	[N＝ 4]	4(100)	1(25.0)	2(50.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)	0(0.0)
		社会情報処理学専攻	[N＝ 7]	6(85.7)	3(42.9)	4(57.1)	1(14.3)	0(0.0)	3(42.9)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(14.3)	0(0.0)
退学理由別	修学意欲低下		[N＝ 7]	5(71.4)	5(71.4)	2(28.6)	3(42.9)	1(14.3)	1(14.3)	2(28.6)	0(0.0)	0(0.0)	1(14.3)	0(0.0)
	進路変更［大学へ］		[N＝ 44]	18(40.9)	9(20.5)	12(27.3)	5(11.4)	26(59.1)	13(29.5)	14(31.8)	10(22.7)	0(0.0)	4(9.1)	1(2.3)
	進路変更［専門学校へ］		[N＝ 15]	8(53.3)	6(40.0)	5(33.3)	0(0.0)	5(33.3)	5(33.3)	6(40.0)	1(6.7)	2(13.3)	2(13.3)	0(0.0)
	進路変更［留学(英語)］		[N＝ 3]	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	3(100)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)
	進路変更［進路不明］		[N＝ 6]	4(66.7)	2(33.3)	1(16.7)	4(66.7)	2(33.3)	0(0.0)	1(16.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(16.7)	0(0.0)
	進路再検討***		[N＝ 5]	5(100)	4(80.0)	2(40.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(60.0)	0(0.0)	1(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	人間関係・雰囲気合わない		[N＝ 3]	2(66.7)	2(66.7)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	健康上の理由（身体的）		[N＝ 1]	1(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100)	0(0.0)
	健康上の理由（精神・心理）		[N＝ 4]	2(50.0)	2(50.0)	2(50.0)	1(25.0)	0(0.0)	2(50.0)	2(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)	0(0.0)
	経済上の理由		[N＝ 5]	2(40.0)	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)	2(40.0)	0(0.0)	1(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	その他		[N＝ 3]	3(100)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

[a]正確には，1994～2000年度に入学し入学時のアンケートに回答した者。　　（　）内は%

[b]正確には，1994～2000年度に入学し入学時のアンケートに回答した者のうちで，1994～2001年度に退学した者。

*大学入試センター試験，帰国子女入試を含む。

**大妻女子大学併設・関連高校推薦入試，指定校推薦入試，公募推薦入試，同窓会員子女推薦入試。

***「学びたい分野と違う」を含む。

****回答は，「3つ以内の回答」を求める多重回答法による。

した動機もなく，なんとなく」という者で0.0%（25名中0名），という結果である。

ここで，注目されるのは「何か新しい分野の勉強ができると思ったので」という理由である。表9を見ると，この理由の者は，推薦入試で入学してきた者（全員）においては57.6%（792名中456名）であるが，推薦入試で入学したにもかわらず退学していった者においては30.0%（20名中6名）と大幅に減少する。逆に言えば，推薦入試を経て入学した場合でも，新しい分野ではなく伝統的な分野への期待が強い場合——とにかくどこかの大学に入学をと考えて推薦入試を経て入学するという過程が推測されよう——，退学につながりやすいといえよう。

最後に，受験の理由（動機）と退学の理由の関係について，上述してきたことと重なることも多いであろうが，見てみよう。きわめて少数例の分布となっており，確実に言えることは乏しいが，何らかの示唆が得られるだけでも意味はあるかもしれない。

まず，「修学意欲低下」による退学について見よう。表9で集計されたものに関して言えば，「修学意欲低下」のために退学するという者の全退学者における割合は7.4%（94名中7名）である。これと比べると，「何か新しい分野の勉強ができると思ったので」受験した者（15.2%，33名中5名）や「本学の学風・雰囲気にひかれて」受験した者（17.6%，17名中3名）にて，「修学意欲低下」が高率である。

いっぽう，他の大学に入りなおすために退学するという者の割合は，全退学者にて46.7%（94名中44名）であるが，「他大学が不合格になったときに備えて」受験した者（63.4%，41名中26名）は「はっきりした動機もなく，なんとなく」受験した者（83.3%，12名中10名）にて高率である。

こうした結果は，推薦入試を経て入学した者と，一般入学試験や大学入試センター試験を経て入学した者の受験理由の違いがそのまま反映されたものといえよう。先に触れたように，多義的な名称の学部は第3志望以下の学校として選択される可能性があり，そうしたばあい入学しても確立した分野の学部への再受験が試みられることがあるということができよう。

ここで，「自分の希望する専攻分野があったので」，正確には，自分の希望する専攻分野があると思って，入学したにもかかわらず，勉学に対して意欲を失って退学してゆく者（5名）や他の大学に入りなおすために退学してゆく者（大学へ18名，専門学校へ8名，など）が少なくないということは，先に述べたようにこの理由は推薦入試を経てきた者に多く，彼らはこのように言わざるを得なかったのだろうということを勘案しても，やはり注意を要するであろう。大学入学後に学びたいことが完全に変わるという場合もあるであろうが，先に触れたように，各様に受け取られうる名称の学部のため，こんなことが学べそうだと期待して入学してきたが，実際は異なっていた（期待した分野との違い），あるいは，こんなことが深く学べそうだと期待して入学してきたが，実際は異なっていた（期待した水準との違い）といった可能性，またとにかく大学に入学をと考えて，多くの場合は推薦されるために，その大学の教育に合わせ，一旦は学ぼうとする分野を設けるが，入学後にもっと学びたいことへの思いが高まるという可能性，あるいは勉学そのものに対する意欲を失ってしまう可能性を否定することはできないのである。

4．おわりに

以上，「情報」や「環境」といった多様な意味を持つ言葉を含む名称の学部の学生がいかなる問題を抱えやすいのかを把握するために，大妻女子大学社会情報学部における開設から10年間の退学者の諸相を調べ，入学者における退学者の割合は約4.4%であること，その割合は他大学の入試に失敗して「第3志望以下」の学校として入学してきた者にて高く，その多くは他の（おそらくはもともと関心をもっていた分野の）学校に入りなおすための退学であること，しかし「第1志望」の学校として入学してきたにもかかわらず退学してゆく者も少なくないこと，を見出した。この，「第

１志望」の学校として入学してきたにもかかわらず退学するにいたるまでの過程として，１）こんなことが学べそうだと期待して，第１志望校として入学してきたが，実際は異なっていたため，他の学校に入りなおす，２）こんなことが深く学べそうだと期待して，第１志望校として入学してきたが，実際は異なっていたため，他の学校に入りなおす，３）一般入試，推薦入試を問わず，学びたいことを棚上げにして，とにかくどこかの大学に入学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第１志望校として入学するが，入学後にその学びたかったことへの思いが高まり，他の学校に入りなおす，４）そもそも特に学びたいことをもたず，とにかくどこかの大学に入学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第１志望校として入学するが，入学後に学びたいことが見つかり，他の学校に入りなおす，５）同じく，特に学びたいことをもたず，とにかくどこかの大学に入学をと考えて，あるいはたとえば親に言われてといった理由で，第１志望校として入学するが，結局は学校での勉学そのものに意欲を失い，退学する，といった流れを推測した。

以上述べた退学の理由や退学にいたる過程が，果して多義的な名称を冠する学部において顕著なのか否か――論理的にはそのように理解されうるのであるが――，推薦入試を経て入学しながら退学してゆく者の問題も混入し，いまだクリアな結論が得られたとは言いがたい。今後，伝統的な学部を含めて比較調査を行う必要があろう。

続く〈その２〉において，入学時に行われたSCTの記述をもとに，主に第２あるいは第３志望以下の学校として入学してきた者の将来像に焦点を当てて，ケース・スタディを行いたい。

謝辞

『退学願』の通覧につき便宜を図ってくださった学生課の諸氏に，また大妻女子大学社会情報学部による公式的な調査である「学生生活調査」の分析と著者の名前での発表を許可してくださった学部長はじめ御協力いただいた諸先生方に，深謝したい。

注

1）対象とした大学では，新入生に対して，入学時に，「健康センター」によって「新入生アンケート」が行われている。いま平成13年度入学生についてその結果（『平成13年度　健康センター学生相談室活動記録』）を見ると，本小論で対象にした学部の新入生は，他の伝統的な学部の入学生よりも，「希望する学部・学科に入学できなかった」「この大学の雰囲気にとけこめなさそうだ」「体の調子がよくない」「頭痛がする」「眠りが浅く，よく寝た気がしない」「気分が明るくない」「これまでの自分は順調ではなかったと思う」「生きているのがつらいと感じることがある」「将来のことがわからないので不安である」「赤面して困る」といった思いや状態（一部表現を変更して引用）が高率となっている。

文献

前納弘武・草柳千早・細谷夏実（2002）「社会情報学部入学生の大学進学をめぐる意識の変容―過去９年間の時系列的分析を中心に―」大妻女子大学紀要―社会情報系―社会情報学研究，11，161－186.

若林佳史・前納弘武・草柳千早（1994）「ある新名称に基づく新設学部における学生の専門領域の認識と学習意欲の把握の試み―大妻女子大学社会情報学部の１期生を例に―」大妻女子大学紀要―社会情報系―社会情報学研究，２，229－259.

Characteristics of Students Leaving without Graduating from School, of University, Bearing a Multivocal Title : The Case of the School of Social Information Studies, Otsuma Women's University Part 1. Period from Admission to Leaving, Reasons for Undergoing Entrance Examination, and Reason for Leaving

YOSHIFUMI WAKABAYASHI
School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

In order to comprehend the possible problems with the students of the school, of university, bearing a multivocal title, the characteristics of students leaving without graduating *the School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*, were studied through statistical analyses of the statements on *'Notice of Withdrawal'* and the answers to the questionnaire undertaken at admission. The following are remarks :

1) The percentage of the students leaving without graduating is 4.4% of the entered students. Of them, the percentages of the students with the period from admission to leaving of less than one year, that with over one year and less than two years, that with over two years and less than three years, and that with over three years, are about 45%, 30%, 15%, and 10%, respectively.

2) As for the reasons for leaving the school, the percentage of "for re-entering another school" is high, while "because of the loss of willingness to learn at school" or "because of the psychic/psychological problems" are low.

3) The percentage of "for re-entering another school" is high in the students leaving with the period of less than one year from admission. While the percentage of "because of the loss of willingness to learn at school" or "because of the psychic/psychological problems" is high in those with the period of over three years.

4) The percentage of the students leaving without graduating is high in the students entering, often with low willingness, through the general entrance examination or the examination of *the National Center for University Entrance Examination*, which are open to everyone. The percentage is never low, by contrary, in the students entering, considered in principle to be with sincere willingness, through the special entrance examination, which is open to only ones recommended by the president of their high school.

5) As for the reasons they underwent the entrance examination, the percentage of the negative ones, such as "for preparing the failure of entrance examination of another university" and "without definite motive, vaguely", is high in the students entering through the general entrance examination and leaving without graduating.

Key Words (キーワード)
Withdrawal from school (退学), Reason of withdrawal (退学理由), Reasons for undergoing entrance examination (受験理由)